

親と祖父母の協力関係を支える保育者の役割とは何か

立石彩優¹ 西館有沙²

The role of nursery teachers in the collaborative relationship between the parents and grandparents on childrearing

Ayu TATEISHI and Arisa NISHIDATE

E-mail: nishiari@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

Grandparents are important source of support physically, mentally, and financially for young parents with small children indeed. But at the same time, when there are disagreements between the two parties, they may increase the stress level since young parents and their parents are involved in close relationships with each other. In this study, on the basis of a role of nursery teacher as an intimate supporter for both parties, we conducted a survey on how often a nursery teacher listens to parents and grandparents as well as what stories they hear from both parties. Many nursery teachers have heard from both parents and grandparents respectively about each other, and about 60% of them have heard negative stories. Many complaints from young parents include: “My parents don’t follow exactly what I asked to do about my child”, “My parents tell me to do differently about how to feed my child”, and “My parents spoil my child by buying anything for him/her”. On the other hand, many complaints from grandparents include: “My daughter/son asks us for help too often”, and “My daughter/son spoils their child too much”. Not infrequently, nursery teachers have hard time offering solutions for these problems. It was revealed in the interviews that both young parents and the grandparents were not seeking for solutions, but rather, they just wanted the nursery teachers to listen to them so that they could get the troubles off their chest. It is probably fair to say from the above observation that the role of a nursery teacher, when supporting collaborative relationship of young parents and the grandparents, is to reduce the stress level of both parties by being attentive, acknowledging the efforts made by young parents and rewarding the grandparents for their support. But the nursery teachers need to do that only to the extent of not getting involved in troubles between young parents and the grandparents or not becoming a source for friction for them.

キーワード: 乳幼児, 親, 祖父母, 保育者, 子育て支援

Keywords: infant, parents, grandparents, nursery teacher, childcare support

I はじめに

近年は共働き家庭が増え、保育所や認定こども園を利用しながら子育てを行う家庭が多くある。内閣府男女共同参画局(2018)によれば、共働き世帯数は2007年に男性雇用者と無業の妻から成る世帯数を上回り、今日まで増加し続けている。共働き家庭では、保育所を利用していたとしても朝夕の保育所への子どもの送迎がむずかしいなど、親だけでは対

応できないことが起こり得る。また、両親のどちらかが仕事をしていない場合であっても、親が用事を済ませる間の子どもの見守りや世話をお願いしたいというように、子育てにおいて支援を必要とすることはしばしばあるものである。そのような時に、親が頼りにできる存在の一つとして、子どもの祖父母が挙げられる。国立社会保障・人口問題研究所(2017)によれば、乳幼児期の子どもをもつ親が祖父母(主に妻方の祖母)から何らかの手助けを受ける割合は1980年代から1990年代にかけて増加し、2000年代以降は全体の約半数を占めるといふ。同調査では、両親が共働きであるケースにおいて祖父母の支援が

¹大阪府庁

²富山大学

多いことも明らかになっており、共働き家庭が増えている現在において、祖父母は親の子育ての重要なサポート資源となっていることがうかがえる。

乳幼児期の子どもをもつ親にとって子どもの祖父母は、子どもの世話という側面においてだけでなく、精神的にも経済的にも重要な支援者であることが複数の先行研究によって明らかにされている（中見・桂田・石，2012；八重樫・江草・李・小河・渡邊，2003；山田・有吉・堀川・石原，2005；山内・千年，2015；山崎・篠原・秋山・市川・尾島・玉腰・松浦・山崎・山縣，2018）。八重樫ら（2003）は幼児期の子どもをもつ母親を対象とした調査より、子育ての相談相手や子育てに関する知識・情報源として祖父母を挙げている母親の子育て不安得点が有意に低かったことを明らかにしている。山内・千年（2015）が全国家庭動向調査を用いて行った集計においては、0～5歳の子どもをもつ母親が出産や育児で困ったときに相談する相手が祖父母であるケースは約4割であったことが示されている。

ただし、どの親にとっても、どのような状況においても、祖父母が常に有効なサポート資源になるというわけではない。親が祖父母からの支援を否定的にとらえた場合には、ストレスや子育ての疲労感を強めてしまう可能性や、祖父母との関係に緊張を引き起こす可能性があるとされている（東・西村・米田・井上・梅山・宮中・堅田・和田・松井，2009；白井・井関・久保・高島，2006）。また、祖父母の立場に立てば、子どもの世話を引き受けることで祖父母自身の生活が制限されることや身体的に疲労すること、親の子育ての仕方や方針にとまどいや抵抗をもつことがある。これによって、祖父母がストレスや疲労感を強めるケースがあることが報告されている（小松・斎藤・甲斐，2010；仲野・長弘・猪狩・道面・斎藤・小笹，2016；曾山・吉田・米田，2015）。

祖父母と同居あるいは近居の子育て家庭が多い地域にある保育施設では、保育者が親だけでなく、祖父母ともやりとりすることが少なくない。保育者は親と祖父母の双方にとって、わが子（孫）のことをよく知ってくれている身近な公的サポーターである。保育者に、親と祖父母が協力して子育てを行うことのむずかしさや葛藤、悩みなどが打ち明けられることは当然あるものと推測される。その際に、双方のストレスの軽減につながる支援を、保育者が担える可能性はある。一方で、保育者ができる支援には限

界もある。保育者にかかる負担をふまえて、保育者にできる支援とは何か、できないこととは何かを整理しておくことが必要である。

そこで本研究では、保育者は祖父母と親の双方からどのような思いを打ち明けられているのかを明らかにした上で、保育者の役割とは何か、保育者が行うことのできる支援とは何かについて整理する。

II 方法

1. 対象

祖父母と同居あるいは近居の子育て家庭が多い地域（X県内の2市）にある保育所と認定こども園118か所に勤務している保育者354名を対象とした。

2. 手続き

2018年6月から7月にかけて、自記式・無記名式の質問紙調査を実施した。郵送法を用いて、質問紙は1園につき3部ずつ、計354部を配布した。回答済みの質問紙は246部を回収した（回収率69%）。回答者の年齢は20代が17%（43名）、30代が41%（101名）、40代が29%（71名）、50代以上が12%（30名）であった（1名は無回答）。また、回答者の保育士としての勤務年数は3年未満が4%（9名）、3年以上5年未満が4%（11名）、5年以上10年未満が15%（36名）、10年以上20年未満が47%（116名）、20年以上30年未満が22%（55名）、30年以上が5%（12名）であった（7名は無回答）。

3. 調査項目

質問紙は、保育者の年齢および勤務年数（選択式）、子どもの祖父母について親から話題が挙がる頻度（選択式、表1）、親からの話の主旨（選択式、表2）、話の内容別（祖父母との付き合い方に関する4項目、祖父母と親の子育て観や育児方法の違いに関する8項目、祖父母の子ども（孫）へのかかわりに関する3項目）にみた話題に挙がる頻度（選択式、図1～3）、具体的な話の内容（自由記述式）、子どもの親について祖父母から話題が挙がる頻度（選択式、表1）、祖父母からの話の主旨（選択式、表2）、話の内容別（子どもの親との付き合い方に関する7項目、親と子ども（孫）とのかかわりに関する3項目）にみた話題に挙がる頻度（選択式、図4～5）、具体的な話の内容（自由記述式）、子どもの親や祖父母から悩み

を打ち明けられた際の対応に関する保育者の考え（5件法，表3）で構成された。

4. 倫理的配慮

質問紙とともに調査依頼文を送り，書面にて研究の趣旨の説明と調査依頼を行った。調査依頼文には，研究への協力は任意であること，質問紙は無記名式であること，幼児や保護者，保育者，園所の情報が漏れないよう，質問紙の保管や分析，論文化において細心の注意を払うことを記した。質問紙の返送により，調査への協力および情報の取り扱いに同意が得られたものとした。

Ⅲ 結果

1. 保育者は（親からの）祖父母に関する話と（祖父母からの）親に関する話をどの程度聞いているか

子どもの親から，子どもの祖父母に関する話題が出たことがあるかどうかを選択式で尋ねた（表1）。その結果，「毎年，祖父母に関する話題を出す親は，少なくとも一人はいる」が最も多く（39%，246名中96名），「毎年ではないが，ときどき，祖父母に関する話題を出す親がいる」（28%，68名），「毎年，祖父母に関する話題を出す親は，多くいる」（24%，60名）であった。次に，子どもの祖父母から子どもの親に関する話題が出たことがあるかどうかについて（表1）は，「毎年ではないが，ときどき，子どもの親に関する話題を出す祖父母がいる」が最も多く

（37%，91名），「毎年，子どもの親に関する話題を出す祖父母は少なくとも一人はいる」（36%，88名），「毎年，子どもの親に関する話題を出す祖父母は，多くいる」（16%，40名）が続いた。祖父母の話は親から聞くことが毎年あるとした保育者は全体の63%，親の話を祖父母から聞くことが毎年あるとした保育者は52%であった。また，親から祖父母について，あるいは祖父母から親について「話題に挙がることはほとんどない」「これまでに聞いたことはない」と答えた保育者はそれぞれ1割程度であった。これらのことから，保育者は，親と祖父母が互いに対して抱いている思いを聞く立場にあるということが確認された。

子どもの親から祖父母に関する話題を聞いたことがある保育者244名（表1の「これまでに，聞いたことはない」2名を除いた）に対して，話の主旨がどのようなものであったかを選択式で尋ねた（表2）。その結果，「祖父母の行為を，好意的にとらえたもの」が最も多く（89%，216名），「祖父母の行為や発言をネガティブにとらえたもの」（62%，151名），「祖父母の発言を，好意的にとらえたもの」（41%，101名）が続いた。また，子どもの祖父母から親に関する話題を聞いたことがある保育者242名に対して，話の主旨がどのようなものであったかを選択式で尋ねたところ（表2），「子どもの親の行為や発言をネガティブにとらえたもの」が最も多く（58%，140名），「子どもの親の行為を，好意的にとらえたもの」（47%，113名），「子どもの親の発言を，好意的にとらえたもの」（26%，64名）が続いた。

表1. 子どもの親や祖父母に関する話題の有無と頻度（単数回答）

	祖父母の話題（親から） N=246	親の話題（祖父母から） N=246
毎年，少なくとも一人はいる	39%（96名）	36%（88名）
毎年ではないが，ときどき，話題を出す人がある	28%（68名）	37%（91名）
毎年，話題を出す人は，多くいる	24%（60名）	16%（40名）
話題が挙がることは，ほとんどない	7%（18名）	8%（20名）
これまでに，聞いたことはない	1%（2名）	2%（4名）
その他	1%（2名）	1%（3名）

表2. 子どもの親や祖父母の話の主旨（複数回答）

	祖父母の話題（親から） n=244	親の話題（祖父母から） n=242
<祖父母もしくは親>の行為を，好意的にとらえたもの	89%（216名）	47%（113名）
<祖父母もしくは親>の行為や発言を，ネガティブにとらえたもの	62%（151名）	58%（140名）
<祖父母もしくは親>の発言を，好意的にとらえたもの	41%（101名）	26%（64名）
その他	4%（10名）	12%（28名）

約9割の保育者が親から、祖父母の行為を好意的にとらえた話を聞いていること、祖父母の発言を好意的にとらえた話を聞いた保育者が約4割いたことから、祖父母が子育てを手伝ってくれることについて親が感謝の気持ちをもっていることや、祖父母が親の精神的なサポート源となっているケースがあることがうかがえる。一方で、親が祖父母の行為や発言をネガティブにとらえた話を聞いたことのある保育者は約6割であり、親が祖父母に対して何らかの悩みをもち、それを保育者に打ち明けていることが明らかになった。また、祖父母が親に関する悩みを保育者に打ち明けているケースもあることが確認された。なお、祖父母が親の行為や発言を好意的にとらえた話を聞いたとする保育者は半数に満たなかった。親は祖父母から子育てについてサポートを受ける立場にあるのに対して、祖父母は親の子育てを支える立場にある。そのため、祖父母の話は「～したらよいのに」「～しないほうがよいのに」という助言者としてのスタンスに立ったものが多くなっていると考えられる。

2. 親はどのような悩みを保育者に話しているか

表2において、祖父母の行為や発言をネガティブにとらえた話を親から聞いたことがあると回答した151名に対して、どのような内容をどのくらいの頻度で聞くかを「まったく聞かない」「あまり聞かない」「ときどき聞く」「頻繁に聞く」の4択で尋ねた。話の内容については、祖父母との付き合い方に関する悩みとして4項目(図1)、祖父母と親の子育て観や

育児方法の違いについての悩みとして8項目(図2)、祖父母の子ども(孫)へのかかわりについての悩みとして3項目(図3)を設定した。図1～3のいずれの内容についても「頻繁に聞く」と答えた保育者はいないか、いても非常に少なかった。

(1) 祖父母との付き合い方に関する悩み

図1より、「頻繁に聞く」「ときどき聞く」と答えた保育者が最も多かった内容は「子ども(孫)のことで頼んだことを、頼んだとおりにしてくれない」であり(50%, 76名)、「子ども(孫)を預かってほしいと頼んでも引き受けてくれないことが多い」(27%, 41名)、「親(自分たち)の都合を考えずに孫に会いたがる」(11%, 16名)が続いた。

「子どものことで頼んだことを、頼んだとおりにしてくれない」という親の悩みは、祖父母との間で思いや子育ての仕方に違いがあることに起因していると考えられる。祖父母が善意で行ったことであると受け止めている親もいるであろうが、多かれ少なかれ、祖父母に自分たちと異なる対応をとってほしくないという思いや、自分たちの考えややり方を理解してほしいという思いがあることが推察される。こうした思いは、親が祖父母に頼んだという背景もあり、祖父母には直接伝えられないことが多いと推測される。そのため、行き場のない思いが保育者に吐露されているものと考えられる。

「子どもを預かってほしいと頼んでも引き受けてくれないことが多い」背景には、祖父母の都合がつかない可能性と、祖父母が子どもの預かりに抵抗を感じている可能性の二つがあると考えられる。宮中

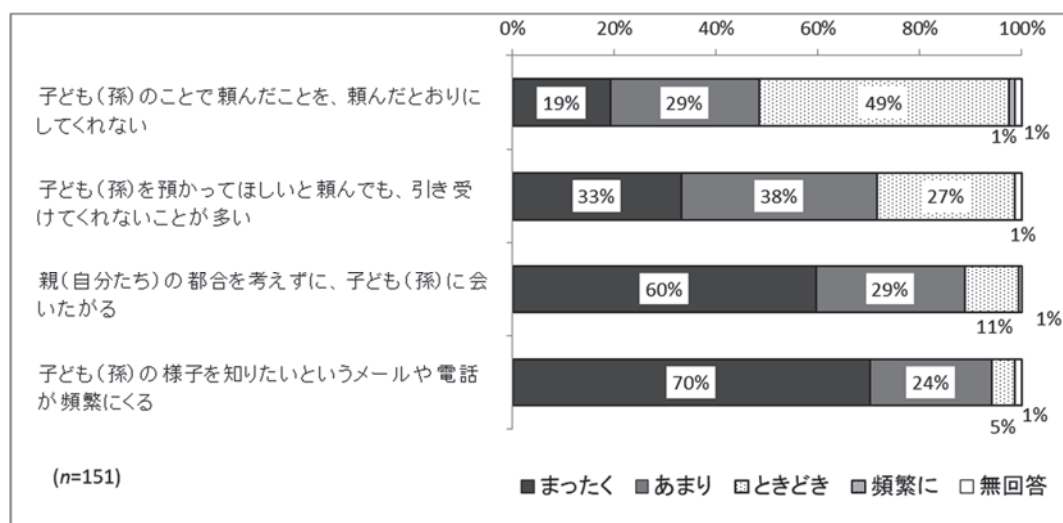


図1. 祖父母との付き合い方について親が悩みを打ち明けた内容

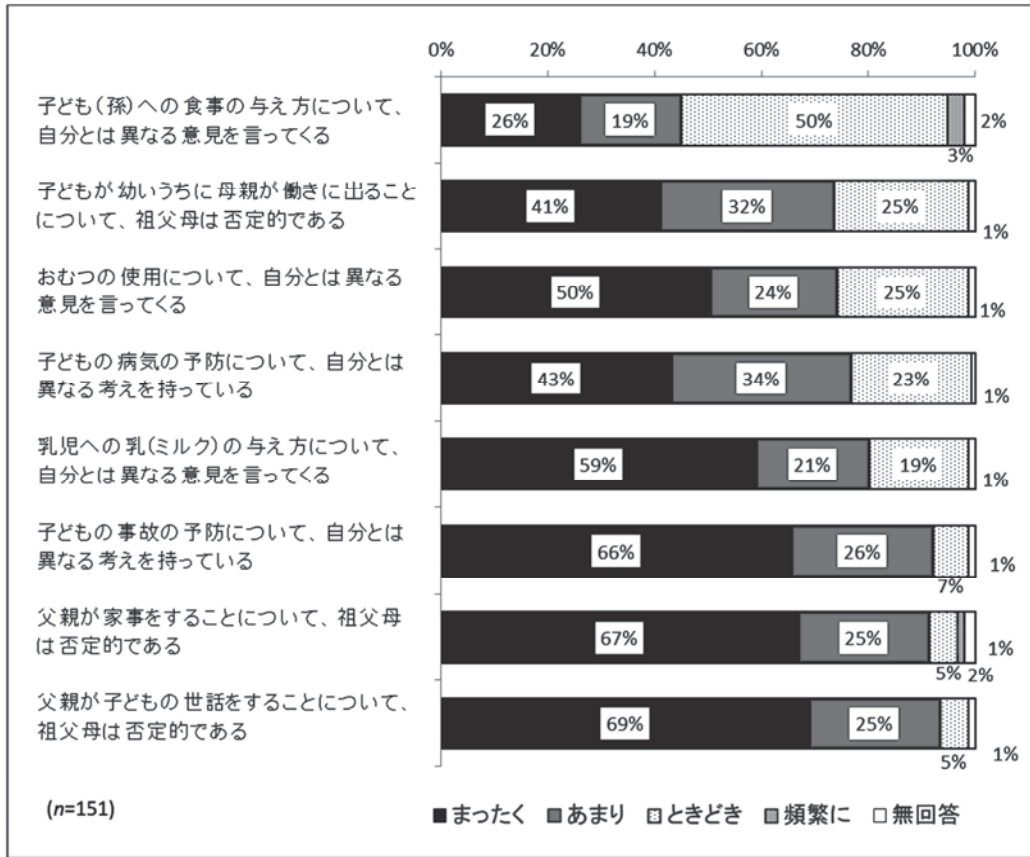


図 2. 祖父母と親の子育て観や子育て方法の違いについて親が悩みを打ち明けた内容

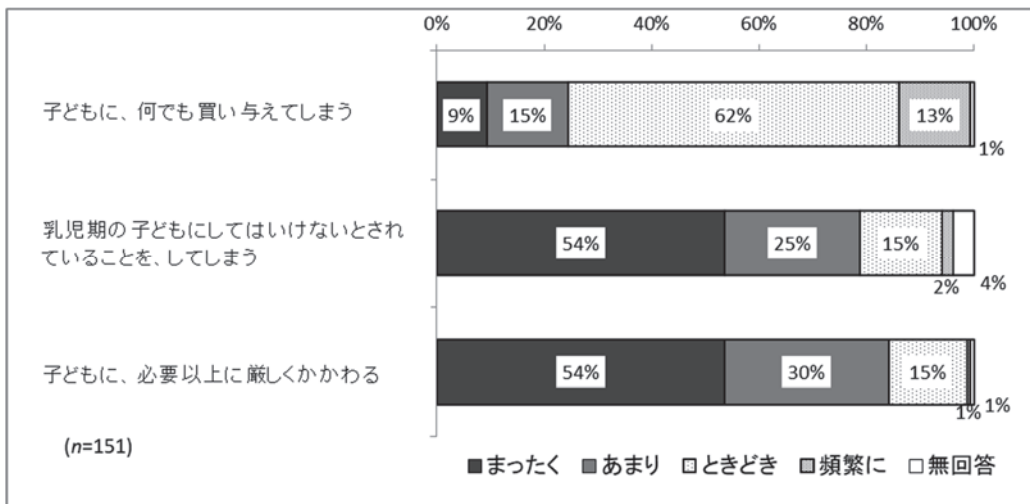


図 3. 祖父母の子ども(孫)へのかかわりについて親が悩みを打ち明けた内容

(2001)の調査では、育児参加において何らかの心配や不安がある祖母は70.8%おり、その内容は「自分の身体の疲労」、「自分が子育てをしていた時と子育ての仕方が異なりとまどう」、「孫の母親との育児方針の相違」、「孫がなつかない」であった。親としても、祖父母の都合や事情にまったく思いを馳せていないわけではないであろう。しかし、子どもを預

かってほしい時に協力が得られない際の苦労があるからこそ、愚痴という形で保育者に打ち明けてくることがあると推察される。

(2) 祖父母と親の子育て観や子育て方法の違いに関する悩み

祖父母と親の子育て観や子育て方法の違いについての悩み(図2)について「頻繁に聞く」「ときどき

聞く」と答えた保育者が多かった内容は「子ども(孫)への食事の与え方について自分とは異なる意見を言うてくる」であり(53%, 80名),「子どもが幼いうちに母親が働きに出ることについて祖父母は否定的である」(25%, 38名),「おむつの使用について自分とは異なる意見を言うてくる」(25%, 37名),「子どもの病気の予防について,自分とは異なる考えを持っている」(23%, 34名)が続いた。

子どもの食事の管理や疾病予防は,子どもの心身の健康に影響するものであるため,祖父母と考えや子どもへのかかわり方が異なると親の不安が高まりやすい内容であると言える。たとえば,「子どもへの食事の与え方について祖父母が自分と異なる意見を言うてくる」という話は,半数以上の保育者が親から聞いた経験をもっていた。この話の具体的な内容について自由記述式で尋ねたところ,「菓子を与えすぎ」「夕食前に菓子を与える」といった菓子の与え方に関すること(47名),「子どもの好きな物ばかりを与える」「チョコやアイス,ジュースなど親が与えないようにしている物を与える」といった食事や間食の内容に関すること(30名),「偏食をなくしてほしいと思っているが,祖父母は無理して食べなくてよいと言う」「祖父母が子どもの嫌いな物を無理に食べさせようとする」といった子どもの好き嫌いへの対応に関すること(10名),「味の濃い物を与える」という味付けに関すること(3名),その他(18名)が挙げられた。厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2016)が行った乳幼児栄養調査の結果によれば,2歳から6歳までの子どもをもつ保護者で子どもの食についての悩みが「特にない」と答えた割合は2割に満たず,「食べるのに時間がかかる」「偏食する」「むら食いがある」「遊び食べをする」「食事よりも甘い飲み物や菓子を欲しがる」「小食である」など,保護者がさまざまな悩みをもっていることが確認されている。このように親自身が悩み,葛藤しながら子どもの食と向き合っているからこそ,祖父母の考えや行為を受け止めるだけの心の余裕をもてなかったり,祖父母の言動にとまどったりすることがあると考えられる。

「子どもが幼いうちに母親が働きに出ることについて祖父母は否定的である」という親の悩みの背景には,祖父母が3歳児神話を受けて,母親が働きに出ることによる子どもへの影響を心配していることがあると考えられる。曾山ら(2015)の調査では,

「子どもが3歳になるまで母親は家にいて仕事に出ないほうがよいと思う」と考える祖母が半数であったこと,仕事に復帰した経験がない祖母ほどそのように考える者が多かったことが明らかになっている。また,子どもの送迎や預かりを祖父母が負担に感じており,その思いを直接的には語れないことから,子どもへの影響の懸念という形で表出している可能性もある。

「おむつの使用について自分とは異なる意見を言うてくる」について,話の具体的な内容を自由記述式で尋ねたところ,「まだおむつが取れないのかと言われる」「1歳を過ぎたらトイレット・トレーニングしなさいと言われる」といったおむつ外しに関すること(34名)や,「紙おむつから布おむつへの移行を勧められる」といったおむつの種類に関すること(8名),その他(4名)が挙げられた。排泄の自立は個人差があるにもかかわらず子どもの成長・発達の目安とされやすいものの一つである。そのため,自立の時期をめぐる意見の対立が起こることがあると考えられる。

(3) 祖父母の子ども(孫)へのかかわりについての悩み

図3より,祖父母の子ども(孫)へのかかわりに関する悩みについて,「頻繁に聞く」「ときどき聞く」と答えた保育者が最も多かった内容は「子どもに何でも買い与えてしまう」であり(75%, 113名),「乳児期の子どもにしてはいけないとされていることをしてしまう」(17%, 26名),「子どもに必要以上に厳しくかかわる」(15%, 23名)が続いた。

祖父母が子どもに何でも買い与えてしまうという悩みを聞いたことのある保育者が多くいた。祖父母は,孫との関係を築く一つ的手段として,また孫に対する愛情表現として,物を買って与えていると推察される。一方の親には,子どものしつけという観点から買い与えを控えてほしいと感じる場面や状況がある。しかし,祖父母の気持ちを無下に拒否したり否定したりすることはできないため,解決しにくい悩みとして,保育者との会話において話題に挙がると考えられる。

3. 祖父母はどのような悩みを保育者に話しているか

表2において,親の行為や発言をネガティブにとらえた話を聞いたことがあると回答した140名に対

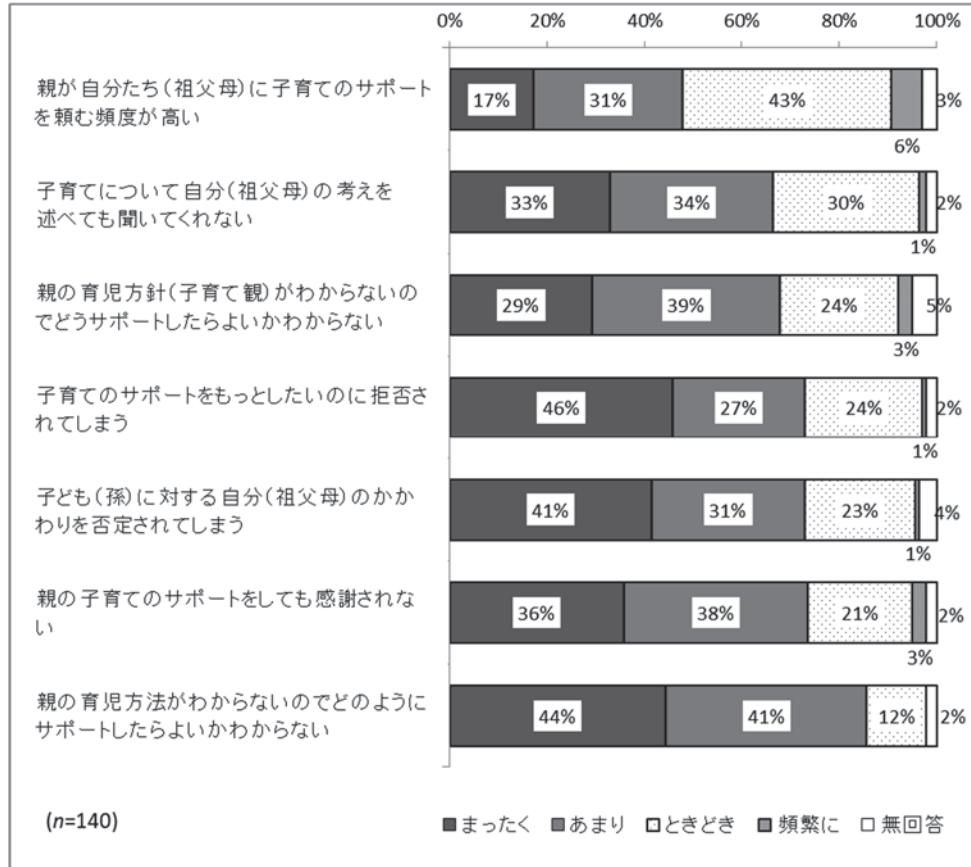


図 4. 親との付き合い方について祖父母が悩みを打ち明けた内容

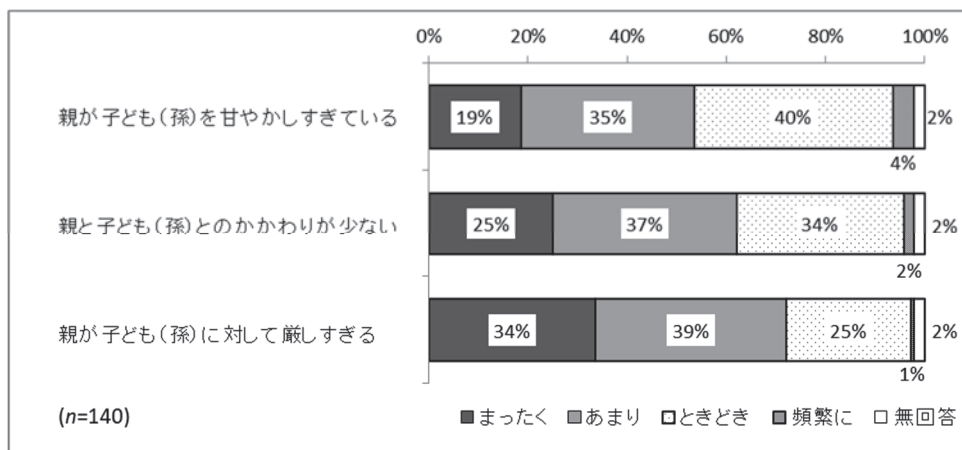


図 5. 親の子育てについて祖父母が悩みを打ち明けた内容

して、どのような内容をどのくらいの頻度で聞くかを「頻繁に聞く」「ときどき聞く」「あまり聞かない」「まったく聞かない」の4択で尋ねた。話の内容については、親との付き合い方についての悩みとして7項目(図4)、親の子育てについての悩みとして3項目(図5)を設定した。

(1) 親との付き合い方についての悩み

図4より、親との付き合い方についての悩み等を

「頻繁に聞く」「ときどき聞く」と回答した保育者は「親が自分たち(祖父母)に子育てのサポートを頼む頻度が高い」という内容において最も多く(49%, 69名),「子育てについての自分(祖父母)の考えを述べても聞いてくれない」(31%, 44名),「親の育児方針(子育て観)がわからないので自分たち(祖父母)がどのようにサポートしたらいいのかわからない」(27%, 38名)が続いた。

「子育てのサポートをもっとしたいのに拒否されてしまう」(25%, 35名)と打ち明ける祖父母がいる(図4)一方で、「親が自分たちに子育てのサポートを頼む頻度が高い」と言う祖父母も少なくないことが確認された。孫を預かることで感じる身体的な疲労、子育て方法の変化へのとまどい、親との育児方針の違いなどにより、孫育てをサポートすることに不安や負担感をもつ祖父母は少なくない(宮中, 2001)。ただし、不安や負担感があったとしても、親の子育てをサポートしたい、子ども(孫)と交流したいという思いが祖父母にないわけではない。そのため、サポートへの不安や負担感、不満を親に直接伝えることはできず、愚痴や悩みという形で保育者に向けて吐露する祖父母が少なくないと推察される。

(2) 親の子育てについての悩み

親の子育てについての悩みに関する話題(図5)についてみると、「頻繁に聞く」「ときどき聞く」と回答した保育者が最も多かった内容は「親が子ども(孫)を甘やかしすぎている」が最も多く(44%, 62名)、「親と子ども(孫)とのかかわりが少ない」(36%, 50名)、「親が子ども(孫)に対して厳しすぎる」(26%, 36名)が続いた。

寺本・柴原(2015)の研究では、子育てを体験した(もしくは終了した)中高年者が抱く現代の子育てに対する違和感として、親の要求の過剰化(従来の親役割を外部に求める姿勢や親の気分転換のための支援の利用)、親の自律性の弱化(子どもの言いなりになっている様子や親としての指針の弱さ)、親子の関係性の希薄化、子どもの資質の変化、家族・社会の多様化、世代間の相互性・継承性の弱体化が挙げられている。こうした違和感が「親が子どもを甘やかしすぎているのではないか」「親と子どもとのかかわりが少ないのではないか」といった心配事につながっていることが推察される。杉井・泊・堀・早川・又賀(1994)の研究では、子育てにおける祖父母の役割について、「豊かな経験をもっているので積極的に子育てに加わるべきだ」と回答した祖父母は

53.9%いる一方で、「祖父母は口出ししないほうがよい」と回答した祖父母は46.1%いることが確認されている。これは少々古い文献ではあるものの、親の子育てにかかわったほうがよいという思いと、口出しすべきではないという思いの間で揺れ動く祖父母は現在も少なくないと考えられる。そのようななかで、子どもへの影響を心配する気持ちを保育者に相談したり、愚痴として吐き出したりすることがあるのであろう。

4. 親と祖父母それぞれへの対応に関する保育者の意識

親と祖父母のそれぞれから悩みを打ち明けられた際に、保育者はどのように対応すべきかについて、保育者の考えを明らかにするため、保育者の対応として4項目(表3)を設定し、それぞれについての程度同意できるかを「まったく思わない」を1、「あまり思わない」を2、「どちらとも言えない」を3、「少し思う」を4、「とても思う」を5とする5件法を用いて尋ねた。表3には、回答者の保育歴によって3群に分け、各項目の平均値を群ごとに算出した結果と、3群間の差の有無について1要因の分散分析を行った結果を示した。分散分析の結果において有意な差が認められた項目はなかったことから、保育者の考えは保護者対応の経験の浅い者であってもベテランであっても変わらないと言える。

表3より項目別に結果をみると、「親や祖父母の気持ちが落ち着くように話を聞くべきである」については3群とも平均値が4(少し思う)を上回っており、保育者はそのようにすべきであると考えた傾向にあった。一方、「親に、祖父母への対応の仕方を助言すべきである」「親と祖父母の間をとりもつ仲介役を務めるべきである」「祖父母に、親への対応の仕方を助言すべきである」は平均値がいずれも3(どちらとも言えない)以下であり、保育者はこれらの対応をとるべきではないと考える傾向にあった。

表3. 親と祖父母それぞれから悩みを打ち明けられた際の対応に関する保育者の考え ※()内の数値はSD

	5年未満	5~20年未満	20年以上	F値
親や祖父母の気持ちが落ち着くように話を聞くべきである	4.35 (0.88)	4.52 (0.78)	4.50 (0.69)	0.46
親に、祖父母への対応の仕方を助言すべきである	2.35 (0.59)	2.20 (0.88)	2.39 (1.07)	1.05
親と祖父母の間をとりもつ仲介役を務めるべきである	3.00 (0.97)	2.49 (1.14)	2.36 (1.06)	2.62
祖父母に、親への対応の仕方を助言すべきである	2.40 (0.75)	2.12 (0.85)	2.30 (1.05)	1.50

IV 考察

保育者が、親と祖父母のそれぞれから、互いについての好意的な話を聞いているケースは少なくなかった。特に、親が祖父母の行為を好意的に受け止める話を聞いている保育者は多く、親が祖父母の協力に感謝の気持ちをもっていることがうかがえた。保育者が親の気持ちに賛同し、祖父母と協力しあえる関係をとともに喜んだり、祖父母に対して親の感謝の気持ちを代弁したりすることは、親と祖父母が協力しあえる関係を側面から支えることにつながると考えられる。

一方で、協力関係において双方の思いの食い違いや考えの相違が生じることはあるものであり、親と祖父母の双方に関するネガティブな話を聞いたことのある保育者も多くいた。親や祖父母が保育者に打ち明けてくる内容には、保育者には解決しにくいものが含まれていた。たとえば、祖父母との付き合い方に関する親の悩みや、親との付き合い方に関する祖父母の悩みである。親も祖父母も、保育者には解決がむずかしい内容であることは承知しているであろう。それでも保育者に打ち明けてくるのは、互いに直接的には伝えにくいことであるだけに、どこかで吐き出したいという思いがあるためであると考えられる。親と祖父母が互いに相手に言えずに胸の内にとめている思いに耳を傾けること（傾聴）、それによって双方のストレスの軽減を図ることは、保育者にできる第一の支援であると言える。

また、親と祖父母が互いの付き合い方について悩みを口にする背景には、身近な存在なのに「認めてもらえない」「わかってもらえない」という体験や、身近な存在であっても「感謝してほしい」という気持ちがあると推察される。これをふまえると、保育者が親や祖父母の思いを受け止めたり（受容）、親のがんばりを認めたり、祖父母のサポートを労ったりすることは、双方の気持ちを代替的に満たすという点で有効であると考えられる。加えて、相手には見えていない苦労や努力、子どもを思う気持ちを代わりに伝えること（代弁）も、相手へのポジティブな気づきを促すという意味で有効と考えられる。相手へのポジティブな気づきは、相手を認めたり、感謝の気持ちをもったりすることにつながると期待される。

さらに、子育て観や子育ての方法の違いに関する

悩みや、子どもへのかかわりについての悩みを打ち明けてくる背景には、「自分の思いや考えに賛同してほしい」「保育者に相手の考えを変えてほしい」といった気持ちがあることが考えられる。しかし、保育者がどちらかの考えを支持したり、どちらかに向けて助言を行ったりすることは、双方の間に入り込むこと（介入）になる。保育者自身は、親と祖父母の仲をとりもつことや、親に祖父母への対応の仕方を助言すること、祖父母に親への対応の仕方を助言することは、自分たちの役割ではないと考える傾向にあった。

保育者が、親や祖父母の関係に介入することは自分たちの役割ではないと考える背景には、安易な介入がもたらす結果への懸念や、トラブルの火種を作ることになってはいけないという思い、自分がトラブルに巻き込まれてしまうかもしれないという心配があるものと推測される。どちらかの言い分を支持したり賛同したりするということは、どちらかの言い分を否定することでもある。親や祖父母が「園の先生は自分の考えを正しいと言ってくれた」「あなたの考えは間違っていると言っていた」と相手に伝えることで、関係悪化のきっかけを作ってしまう可能性はある。場合によっては、保育者がトラブルに巻き込まれてしまうことも起こりうる。このことをふまえると、親と祖父母からの自分の考えを支持してほしいという働きかけに応じることや、相手の言い分の誤りに同調してほしいという求めに応じることが控えるべきである。また、親や祖父母の話が相手への悪口になってしまった場合には、それに同調しないようにする、話題を変えるなどの対応が必要になると考えられる。

親や祖父母からの要望に応じて、相手に子育ての方法についての正しい情報を伝えることにも慎重になる必要がある。情報提供を受ける側がどのような心理状態にあるか、保育者とどのような関係にあるかによって、プラスに働くかマイナスに働くかが異なるためである。たとえば、祖父母に対する情報提供として、近年では自治体が祖父母向けの子育て手帳（孫育て手帳）を発行したり、祖父母向けの子育て講座を開催したり（斎藤，2014；横川・名須川・大西，2015）する取り組みがある。保育者が多くの役割を一手に引き受けるのではなく、さまざまな機関が役割を担いあうことで、親と祖父母の協力関係を支えていくことが必要である。

文献

- 東雅代・西村真実子・米田昌代・井上ひとみ・梅山直子・宮中文字子・堅田智香子・和田五月・松井弘美 (2009) 乳幼児をもつ母親の育児困難の状況－母親および子育て支援にかかわるエキスパートへのフォーカス・グループ・インタビューから－, 石川看護雑誌, 6, 1-10.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 『現代日本の結婚と出産－第 15 回出生動向基本調査 (独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書』, 国立社会保障・人口問題研究所.
- 小松紗代子・斎藤民・甲斐一郎 (2010) 孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察, 日本公衆衛生雑誌, 57(11), 1005-1014.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 (2016) 平成 27 年乳幼児栄養調査結果の概要, 厚生労働省, <<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000134208.html>>, (最終閲覧日 2018 年 11 月 18 日).
- 宮中文字子 (2001) 中高年女性 (祖母) の子育て参加と心理的健康との関連について, 日本女性心身医学会雑誌, 6(2), 173-180.
- 内閣府男女共同参画局 (2018) 男女共同参画白書平成 30 年版, 内閣府, <http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h30/zentai/pdf/h30_genjo.pdf>, (最終閲覧日 2019 年 9 月 26 日).
- 中見仁美・桂田恵美子・石曉玲 (2012) 幼児子育て期における家族からのサポートの重要性, 園田学園女子大学論文集, 46, 227-239.
- 仲野宏子・長弘千恵・猪狩明日香・道面千恵子・斉藤ひさ子・小笹美子 (2016) 60 歳代祖母による孫の世話の状況と疲労との関連, 日本地域看護学会誌, 19(1), 14-23.
- 斎藤嘉孝 (2014) 祖父母むけ公的プログラムにおける効果評価とリクルーティングー“孫育て講座”に関する事例検討ー, 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 11, 215-227.
- 白井瑞子・井関敦子・久保素子・高島明美 (2006) 母のサポートに対する娘 (第 1 子育児早期) の意識と依存性の関連, 香川母性衛生学会誌, 6(1), 29-36.
- 曾山小織・吉田和枝・米山昌代 (2015) 祖母の子育て経験と孫育てに対する意識との関連, 日本看護研究学会雑誌, 38(1), 139-150.
- 杉井潤子・泊裕子・堀智晴・早川淳・又賀淳 (1994) 祖父母・孫関係に関する研究第 3 報ー「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価ー, 大阪市立大学生活科学部紀要, 42, 141-153.
- 寺本妙子・柴原宣幸 (2015) 中高年女性による地域子育て支援に関する調査研究: 現在の子育てに対する違和感について, 日本橋学館大学紀要, 14, 61-73.
- 八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子 (2003) 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響, 川崎医療福祉学会誌, 13, 233-245.
- 山田英津子・有吉浩美・堀川淳子・石原逸子 (2005) 働く母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態, 産業医科大学雑誌, 27(1), 41-62.
- 山内昌和・千年よしみ (2015) 親の居住地からみた育児期の夫婦の関係性: 『全国家庭動向調査』を用いた特別集計, IPSS Working Paper Series (J), 13, 1-26.
- 山崎さやか・篠原亮次・秋山有佳・市川香織・尾島俊之・玉腰浩司・松浦賢長・山崎嘉久・山縣然太郎 (2018) 乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連: 健やか親子 21 最終評価の全国調査より, 日本公衆衛生雑誌, 65(7), 334-346.
- 横川和章・名須川知子・大西もよ (2015) 子育て支援における祖父母世代のかかわりに関する研究ー実践で学ぶ「まちの寺子屋師範塾」の事例からー, 兵庫教育大学研究紀要, 46, 21-30.

(2019 年 10 月 11 日受付)

(2019 年 12 月 18 日受理)